生活

菊池　勇希
小原　広士

思いや願いの実現に向かって主体的に活動することを通して，一人一人がよさや可能性を拓く生活科の学習

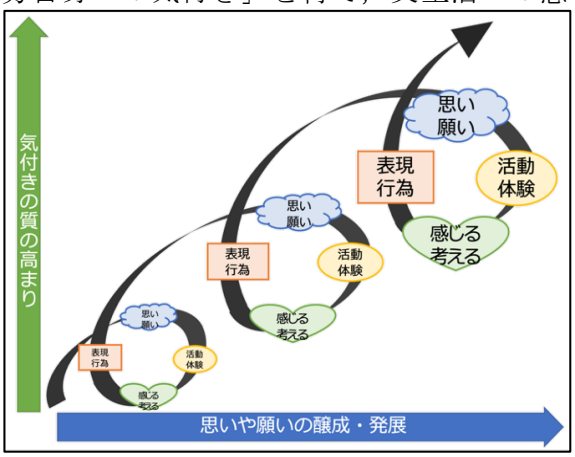
Ⅰ　生活科研究の方向性

１　主題設定の理由

学習指導要領において，生活科は「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」の育成を目標としています。今まで以上に「発達段階に応じた思考や認識の育成」「幼児教育との接続」「中学年の各教科等への接続」を大切にするとともに，一人一人の思いや願いが実現する活動や体験を重視した学習活動を展開することで，児童が生活科の学びを実生活に生かし，よりよい生活を創造していくことが求められています。

これまでの本校の研究では，体験活動と表現活動とが豊かに行き来する相互作用を重視した学習過程を大切にしてきました。特に，伝え合い交流する場の工夫により，児童が次の活動や体験を創り出す姿が見られました。一方で，対象と関わる活動や体験を通して，自分と対象との関わりを深め，自分の存在・よさ・成長などといった「自分自身への気付き」を得て，実生活への意欲や自信をもつことについては課題が残りました。

本校全体研究では，「探究する子供を育てる教育活動の創造」をテーマとしています。生活科における探究とは，児童が生活科の学習過程（思いや願いをもつ，活動や体験をする，感じる・考える，表現する・行為する）を連続的・発展的に繰り返し，気付きの質を高めていくことと押さえました。児童が生活科の学習過程を連続的・発展的に繰り返していくためには，学習の原動力である「思いや願い」を醸成したり発展させたりすることが重要です。また，思いや願いの実現に向かって自ら対象へ関わったり，関わりを繰り返したりすることができる単元構成や指導と評価の工夫が必要です。



【生活科における探究のイメージ図】

そこで，研究主題を「思いや願いの実現に向かって主体的に活動することを通して，一人一人がよさや可能性を拓く生活科の学習」と設定しました。「思いや願いの実現に向かって主体的に活動する」とは，児童が思いや願いを明確にし，その実現のために自ら対象へ関わったり，関わりを繰り返したりすることです。また，「一人一人がよさや可能性を拓く」とは，思いや願いの実現に向かう活動や体験を繰り返すことを通して，気付きの質を高め，よりよい生活を創造する意欲や自信をもつことです。

２　目指す児童の姿とその具体

対象への主体的な関わりを通して，自分や対象をよりよく理解する児童

「対象への主体的な関わり」とは，児童が思いや願いを実現するために，活動や体験に没頭したり，繰り返し対象と関わったり，対象とのよりよい関わり方を模索したりすることです。

「自分や対象をよりよく理解する」とは，児童の気付きの質が高まることです。そして，気付きの質が高まることで児童が満足感や成就感，やり甲斐などの手応えをもち，生活科での学びを実生活に生かす意欲や自信をもつことです。

Ⅱ　研究内容の具体

１　思いや願いの実現に向かう単元構成の工夫

生活科では，児童の思いや願いを大切にし，その実現に向かうことができるよう単元を構成することが重要です。そこで，思いや願いの醸成や発展を促し，学習過程を連続的・発展的に繰り返していくための学習活動について整理しました。また，児童が思いや願いを実現するためには，他教科等で育んだ資質・能力を活用したり，学校内外リソースを活用したりすることが必要だと考え，カリキュラム・マネジメントの視点に立った単元構成について研究を進めました。

《思いや願いの醸成や発展につなげる学習活動》

①対象に浸り，興味や親しみを高める　　②対象への出会いによって憧れを抱く
③ずれや隔たりにより課題意識を高める　　④目指すべき姿を明確にし，意欲を高める
⑤相手意識や目的意識を基に活動を見直す　　など

《カリキュラム・マネジメントの視点での単元構成》

①教科横断的な視点での単元構成（国語や図画工作等との合科的・関連的な指導の充実）
②学校内外リソースを活用した単元構成（校内の自然や教材園，異学年，地域人材等の活用）

２　気付きの質を高めることを支える働き掛けの工夫

生活科では，児童が思いや願いをもって対象と関わるとともに，教師の意図的・計画的な働き掛けによって児童の気付きの質を高めていくことが重要です。そこで，体験活動や表現活動において気付きの質を高めることを支える教師の働き掛けについて研究を進めました。

《体験活動における教師の働き掛け》

①個別的な気付きを促す働き掛け
・思いや願い，行動の言語化　　・行為に対する称賛や共感，励まし　　など
②関係的な気付きを促す働き掛け
・「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」「見通す」「工夫する」を促す言葉掛け　など
③自分自身への気付きを促す働き掛け
・時間軸で振り返る　　・空間軸で振り返る　　など

《表現活動における教師の働き掛け》

①時間や空間を超えて対象とつながるICTの活用
・写真や動画，音声等の活用　　・学習カードや振り返りの蓄積　　など

３　自分や対象をよりよく理解する評価の工夫

学習活動を児童の思いや願いに寄り添った形にすることによって，一人一人の気付きは多様なものになります。そこで，多様な気付きを想定し，多様な気付きを評価し，指導に生かすために「気付きの想定表」を作成しました。また，各観点において「気付きの想定表」を活用して，どのように評価を行っていけばよいのかについて研究を進めました。

《「気付きの想定表」の作成》

①児童の発達の段階や特性を考慮し，想定される「気付き」を具体化する
②気付きの質を高めるために必要な「思考」を明確にする
③気付きの質を高める際に発揮される社会情動的スキルに着目し，「態度」を明確にする

《「気付きの想定表」を活用した評価》

①知識・技能の評価
・具体化した「気付き」が，児童の姿に表れているかを評価する。
※「気付きの想定表」に具体化した気付きは，あくまで一例。想定できなかった気付きは，具体化した他の気付きを基にしながら位置付けを明確にすることが重要。
②思考・判断・表現の評価
・明確にした「思考」を働かせることを通して，児童の気付きの質が高まる姿を評価する。
③主体的に学習に取り組む態度の評価
・明確にした「態度」が，学習場面や日常生活において発揮される姿を評価する。

＜３年次研究の重点＞

○「気付きの想定表」を活用した，自分や対象をよりよく理解する評価の工夫
○思いや願いの醸成や発展を促し，対象と主体的に関わる単元構成の工夫

Ⅲ　研究実践

２年生実践　『うごく おもちゃ けんきゅうじょ』

実践のテーマ：よりよく動くために工夫したこととその結果を比べることで，
動くおもちゃを改良する方法を考える学習

１　研究授業のねらい

本単元のねらいは，身近にある物で「動くおもちゃ」を作って遊ぶ活動を通して，おもちゃがよりよく動くように改良したり遊び方やルールを変えたりするなどの工夫をすることができ，風やゴムなどの力の不思議さやそれらを使った遊びの面白さに気付くとともに，みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとすることです。

単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	風やゴムなどの力の不思議さやそれらを使った遊びの面白さに気付いている。	おもちゃがよりよく動くように改良したり遊び方やルールを変えたりするなどの工夫をしている。	みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。

小単元における評価規準		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	1	①身近にある物は，様々な遊びに利用できることに気付いている。	①楽しみたい遊びを思い描きながら，遊びに使う物を選んでいる。	
	2		②予想したり試したり比べたりしながら，動くおもちゃをつくったり遊んだり改良したりしている。	①動くおもちゃに興味をもち，繰り返し遊ぼうとしている。
	3	②材料や作り方などを変えることで，おもちゃの動きや面白さが変化することに気付いている。		②動くおもちゃを作ったり動くおもちゃを使った遊びを考えたりしたいという思いや願いをもち，繰り返しおもちゃや遊びを工夫したり友達のおもちゃや遊びのよさを生かそうとしたりしている。
	4			
	5	③ルールや遊び方を工夫することで，みんなと楽しく遊べることに気付いている。	③様々な遊びを試したり比べたりしながら，みんなと楽しく遊べるよう改良している。	

２　単元の指導計画

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）	研究視点１
0		◇１年生の「あきのたからものランド」に参加する ・自分たちもおもちゃを作って遊びたいな。　など ◇プレールームにおもちゃの材料を集める		**思いや願いの醸成** ②おもちゃづくりへの憧れ
1	① ②	◇集まった材料で遊ぶ ◇自分がした遊びについての気付きを共有する ・いろんな物を動かして遊ぶと楽しいね。 ・うごくおもちゃを作って遊びたいな。　など	思①　記録 （行動・振り返り） 知①　記録 （振り返り・発言）	**思いや願いの醸成** ①身近にある物を使った遊びに浸る
2	③ ④	◇見本の動くおもちゃについて研究する ◇研究結果を共有する ・動くおもちゃを自分で作ってみたいな。 ・僕はもっと〇〇するように作りたいな。　など	態①　記録 （行動・振り返り） 思② （行動・振り返り）	**思いや願いの醸成** ②動くおもちゃ作りへの憧れ
3	⑤ ⑥ ⑦	◇集めた材料で動くおもちゃを作る ◇研究結果を共有する ・もっと遠くまで動かしたい。　など ◇動くおもちゃ博士の条件を考える ・思い通りに動かせる。　・研究結果を伝えられる。 ・諦めないで「はてな？」を解決する。　など	思② （行動・振り返り） 知② （振り返り・発言）	**思いや願いの発展** ③ずれや隔たりによる課題意識 ④目指す姿の明確化による意欲の向上
4	⑧ ⑨ ⑩ ⑪	◇動くおもちゃ博士を目指して，おもちゃを改良する ◇動くおもちゃの作り方の説明書を作る *※国語「おもちゃの説明書」との関連的な指導（３時間）* ◇動くおもちゃ研究発表会をする ・友達の作ったおもちゃで遊んでみたいな。 ・次は動くおもちゃの「遊び方」を研究したいな。　など	思②　記録 （行動・振り返り） 態② （振り返り・行動） 知②　記録 （振り返り・発言）	**思いや願いの発展** ⑤「おもちゃ」から「遊び」への目的意識の転換
5	⑫ ⑬ ⑭ ⑮	◇動くおもちゃを使った遊びを研究する ◇動くおもちゃを使った遊びの説明書を作る *※国語「おもちゃの説明書」との関連的な指導（３時間）* ◇学級のみんなと動くおもちゃを使って遊ぶ ◇動くおもちゃを作ったり，遊んだりした学習を振り返る ・自分たち以外にも，研究した動くおもちゃやそれを使った遊びについて伝えたいな。　など *※次単元「動くおもちゃランド（内容８）」につなげる*	思③　記録 （行動・振り返り） 態②　記録 （振り返り・行動） 知③　記録 （振り返り・発言）	**思いや願いの発展** ⑤「自分たち」から「自分たち以外」への相手意識の転換

３　本時の学習

(1) 本時の目標

よりよく動くために工夫したこととその結果を比べながら，動くおもちゃを改良する方法を考えることができる。（思考・判断・表現）

(2) 本時の展開（15 時間扱いの９時間目）

学習内容と主な学習活動	研究との関わり・留意点
1　前時までの学習を確認する。 ・前時までにわかったことを発表する。 2　学習内容をとらえる。	
動くおもちゃ博士を目指して，おもちゃをもっと〇〇にしよう。	
・本時の見通しをもつ。 「今日はゴムの数を増やしてみよう。」 「今日は帆を大きくしてみよう。」 「今日は車をもっとかるくしてみよう。」	・児童は，前時の振り返りの段階で，ある程度本時の活動の見通しをもっている状態である。 ・全体でそれぞれの見通しを共有することで，本時の活動の方向性をより明確にする。
3　動くおもちゃを改良する。 ・研究チーム毎にエリアを決めて活動する。	**◇体験活動における教師の働き掛け** **研究視点２** **◇「気付きの想定表」を活用した評価** **研究視点３** ・児童が構想した工夫に取り組む場面では，「どう動くようになってほしいのか」「そのためにどう工夫するのか」などを問い，工夫点を明確にできるように促す。また，考えた工夫をうまく実現することができるよう支援する。 →前時までの評価を指導に生かす。
・工夫し終えたら，実際に動かしてみる。	・児童が動きを確かめる場面では，「何を工夫したか」「その結果どうなったのか」などを問い，工夫点と結果の関係性を捉えられるように促す。
・次の工夫を考えて実践する。	・新たな工夫を構想する場面では，「次はどんな工夫ができそうか」「その工夫をするとどう動きが変わるのか」などを問い，考えたことを基に新たな工夫点を考えられるようにする。
4　研究チームで結果を伝え合う。 ・「工夫」「結果」「考えたこと」について共有する。 ・新たな工夫を構想する。 ・必要に応じて困り感を共有し，解決につなげる。 5　チームの研究結果を共有する。 6　研究レポートを書く。	【評価規準　思考・判断・表現②】 よりよく動くために工夫したことやその結果を比べながら，動くおもちゃを改良する方法を書いたり，話したりしている。（発言，ワークシート）
〇〇すると●●になることが分かった。 次は□□して，もっと■■になるようにしたい！	

◇授業の見所・本時で願っている児童の姿

〇工夫点と結果を比較することで，その関係を考える姿

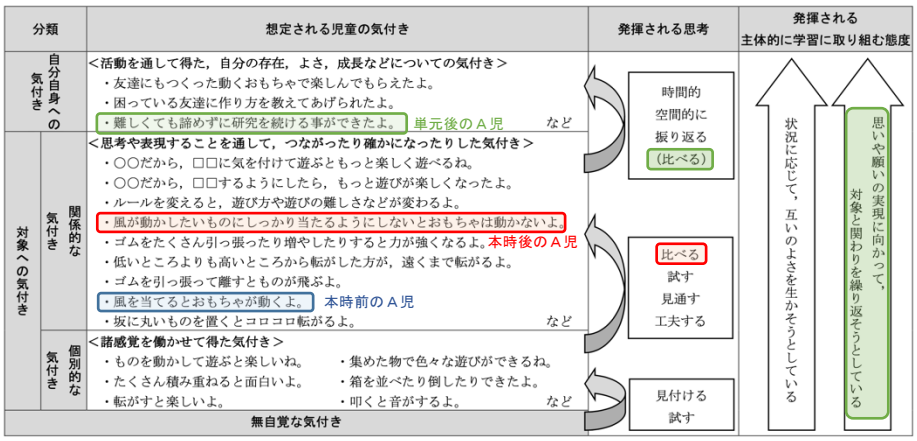
〇導き出した自分なりの関係を基に，さらなる工夫を考える姿

４　授業の実際

「気付きの想定表」を活用した，自分や対象をより良く理解する評価の工夫

本単元では，児童が動くおもちゃを作ったり遊んだりする中で，風やゴムなどの力の不思議さやそれらを使った遊びの面白さについて気付き，その質を高めていきます。そこで，本単元における児童の具体的な気付きの姿やそこで発揮される思考や態度を「気付きの想定表」として下のように整理しました。そして，児童の気付きの姿や思考，態度を評価する手掛かりとし，指導に生かしました。

A 児は,「風の力で遠くまで動く車をつくる」というめあてのもと，空き箱やペットボトルキャップなどを組み合わせて車体の両側に翼の付いた車を作っていました。しかし，風を当てても車がなかなか遠くまで動かず，そこに課題意識をもっていました。



【本単元の「気付きの想定表」とＡ児の気付きの変容】

そこで，教師は，A 児が工夫したこととその結果を比べることで新たな気付きを得ることができるように右のような働き掛けを行いました。本時の終わりに，A 児は,「風を（翼の）右だけに入れたら左に行って，左だけに入れたら右に行ったから，両方に入れてみたら真っ直ぐ前に行った」と学びを振り返りました。

このことから，A 児は，本時の学習で工夫したこととその結果を比べることを通して，「風の当て方によっておもちゃの動き方が変わる」という関係的な気付きを得ることができました。

また，その後の学習で，A児は，翼に加えて，車体上部に帆のようなものを付けました。帆の形や向きにもこだわり，何度もいろいろな形を試したり比べたりすることで，納得した動きの車にすることができました。そして，単元後の振り返りでは,「すぐに諦めないでもう一度やるということが分かって，諦めないほうがよい」という自分自身への気付きを得ることができました。

このように，工夫したこととその結果を「比べる」ことを促す働き掛けを行うことで，自らの工夫が正しかったのかを判断したり，新たな課題を見出して動くおもちゃを改良する方法を繰り返し考えたりする姿が見られました。また，教師の働き掛けによって，児童の気付きを言語化し，無自覚であった気付きを自覚的にしたり，個別的な気付きを繋げたりして，気付きの質の高まりを支えることができました。

教師　Ａくん，どうだい？うまくいった？【結果の比較】
Ａ児　先生，前より遠くまで進んだ。
教師　やったね。どんな工夫をしたの？　【工夫の比較】
Ａ児　箱をとったり，羽の箱を半分にした。
教師　そうなんだ。どうしてそうしたの？【思いの比較】
Ａ児　だって，軽いほうが進むと思ったから。
　　でも，今度は曲がるようになったから
　　それを直したい。
教師　頑張ってね。
（しばらくして，Ａ児がやってくる）
Ａ児　先生，さっきの分かった。
　　風の当て方が大事なんだと思う。
教師　当て方を変えたらうまく言ったの？【工夫の比較】
Ａ児　まだやってないけど，風がちゃんと当たって
　　いなかったと思うから，やってみる。
教師　そうなんだ。分かったら教えてね。

【Ａ児への働き掛け】

きょうは、羽のはこを、半分にきって風をみぎだけにいれたら、ひだりにいってひだりだけにいれたらみぎにいったから、りょうほうにいれてみたら、まっすぐまえにいった。

【授業後のＡ児の振り返り】

さいしょの自分はすぐあきらめてダメダメだったけど今のじぶんのほうがあきらめないでできているからこのじぎょうのおかげでこれからのせいかつにいかせて**すぐにあきらめないでもういちどやるということがわかってあきらめないほうがいいということがわかって自分がせいちょうしたと思っています。**

【単元後のＡ児の振り返り】

思いや願いの醸成や発展を促し，対象と主体的に関わる単元構成の工夫

本単元では，児童がおもちゃを作るために集めた材料を使って遊び，素材の特徴を捉えたり遊びのイメージを着想したりする活動から学習を始めました。その際，学習環境の構成を工夫し，ベニヤ板でつくったスロープで身近にある物を転がしたり，床に貼り付けた平ゴムを使って身近にある物を飛ばしたり，扇風機を使って積み上げた物を倒したりできるようにしました。このよう

に，身近にある物に触れたり動かしたりする遊びに浸ることで「身近にあるものを動かして遊びたい」という思いや願いを醸成することができました。

また，その後の学習においては，第１次で醸成した思いを原動力とし，「憧れを抱く」「ずれや隔たりにより課題意識を高める」「目指す姿を明確にし，意欲を高める」「目的意識や相手意識をもとに活動を見直す」などの学習活動を行い，思いや願いを発展させていきました。その結果，生活科の授業だけでなく，休み時間や他教科等の授業（国語科「おもちゃの説明書」など）でも主体的に対象と関わろうとし，生活科での学びを実生活に生かし，よりよい生活を創造しようとする姿が見られました。

【環境を生かして対象と関わる姿】

【主体的に対象と関わろうとする姿】

Ⅳ　３年次研究の成果と課題

３年次研究では，「『気付きの想定表』を活用した，自分や対象をより良く理解する評価の工夫」「思いや願いの醸成や発展を促し，対象と主体的に関わる単元構成の工夫」を重点として研究を進めました。

１　研究の成果

○工夫したこととその結果を「比べる」ことを促す働き掛けを行うことで，自らの工夫が正しかったのかを判断したり，新たな課題を見出して動くおもちゃを改良する方法を繰り返し考えたりする姿が見られました。

○教師の働き掛けによって，児童の気付きを言語化し，無自覚であった気付きを自覚的にしたり，個別的な気付きを繋げたりして，気付きの質の高まりを支えることができました。

○対象に浸る活動や学習のねらいに向かうための環境構成を大切にした単元構成とすることで，児童が対象へ思いや願いをもって主体的に関わろうとするとともに，生活科での学びを実生活に生かそうとする姿が見られました。

２　今後の課題

○教師が「気付きの想定表」にある姿を求めすぎるが故に，働き掛けが意図的な促しとなってしまい，児童の思いや願いと乖離してしまうことがありました。

○「気付きの想定表」の内容については，児童の実態に応じて絶えず見直しをかけるとともに，カリキュラム・マネジメントに生かしていくことが必要です。

Ⅴ　参考文献

○小学校学習指導要領解説　生活編　文部科学省　東洋館出版社　平成29年６月
○初等教育資料 No. 982「他教科等との関連を意識し，指導の効果を高める生活科の在り方」
文部科学省　東洋館出版社　令和元年７月
○初等教育資料 No. 996「思考や認識の育成に向けた意図的・計画的・組織的な授業づくり」
文部科学省　東洋館出版社　令和２年８月
○初等教育資料 No. 1011「体験活動と表現活動を相互に繰り返すことにより，気付きの質を高める学習活動の充実」　文部科学省　東洋館出版社　令和３年８月
○「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校　生活】
国立教育政策研究所　東洋館出版社　令和３年９月
○日本生活科・総合的学習教育学会　第27回全国大会　北海道大会　大会紀要
日本生活科・総合的学習教育学会　平成30年６月
○生活科の探究　No. 121　生活科教育研究会　令和２月11月
○学習評価　田村学　東洋館出版社　令和３年５月